

秩父におけるローカル・ナレッジの拠点づくりー大学と地域の連携ー

Rural Development by making use of Local Knowledge in Chichibu

プロジェクト代表者：山本 充 (教養学部・教授)

Mitsuru Yamamoto (Professor, Faculty of Liberal Arts)

1 はじめに

本事業は、ローカル・ナレッジ、すなわち地域において受け継がれてきた生活にかかわる思想や技術、習慣などを掘り起こし、評価・整理して蓄積し、地域再生の資源として活用する方策を考え、さらには情報として地域内外に発信する場を、大学と地元住民との連携のもとに作り出そうとするものである。そして、埼玉県秩父市の一集落をフィールドとし、地元住民や学生らが協同で、集落のローカル・ナレッジを集積し活用する拠点を構築することを目指す。

2 祭礼行事とローカル・ナレッジ

年中行事や祭礼は、担い手である住民の減少など様々な要因によって行なわれなくなったり、規模や内容が縮小されていく場合がある。聞き取り調査の際も「いまは（あまり）やっていない」と言う言葉が多く聞かれた。しかし地域住民からの聞き取りからは、祭りの光景が鮮やかに浮かび上がり、生活の重要な構成要素であったことがうかがえる。

祭りの中心は信仰にまつわる儀式であるが、祭を構成しているのはそれだけでなく、時期や場所、構成員の属性や行事の内容、生業とのかかわり、食事、その中で起こる様々な出来事などである。どのような祭りが執り行われてきたか、時期や内容などがどのように変化したのか、行なわれなくなったものにはどのようなものがあるのか、新たに作り出されたものにはどのようなものがあるのか、などを掘り起こしてゆくことによって、祭りを構成する様々な事象についても体系的に明らかにすることができるであろう。そしてそれは石間の「ローカル・ナレッジ」というものを、知識の断片としてではなく、関連づけて捉えるために必要な素地となると考えられる。

3 ローカル・ナレッジとしての食

石間における伝統食とその変遷を把握する中で、この地域に特徴的なローカル・ナレッジとしての「食」として次を挙げることができた。(1)「つつっこ」のように身の回りの自然を活かした料理、(2)いろりをつかった家庭の装置を使った料理(もろこしまんじゅう等)、(3)特産であるこんにやく、(4)季節料理・「晴れ」の料理としての正月のえべす溝や、節句のときなどの魚。正月にはさんま、節分にはいわし、(5)麦をつくときの水車の使用法や、貸し借りに関する集落ごとのルール、である。

しかし、これらはいずれも現代において次第になくなりつつあるものが多い。「つつっこ」こそ現代でも作られるものの、もろこしまんじゅうは、いろりを使わなくなり、ふたをしてしまった家庭が多い今では作りようがない。こんにやくについては、その出荷価格が下落したこともあり、今では出荷用に作物を栽培している家庭はほぼなくなってしまった。ハレの食も最近ではほぼなくなっている習慣であるし、水車についても今では中郷の復刻されたものだけである。

このような現状で、石間地区のローカル・ナレッジを活かすには、次の3つが考えられる。第1に、

比較的つくりやすい「つつっこ」の活用である。「つつっこ」については、さほど難しい調理を必要とせず、栃の葉の殺菌力、荷崩れない葉の強さ等を学ぶことができる。体験料理講座などで容易に学ぶことができよう。第2に、原料を石間からのみ調達するのは難しいように思えるが、生いものこんにやくである。生いものこんにやくは、その味を知らない人も多いように思う。健康的な食べ物であるし、「味噌をつけて」という食べ方だけでなく、創作的な料理を作れる可能性があるだろう。第3に、復刻された水車を、石間のシンボル・象徴として利用することである。交流会館のパンフレットでも表紙になっている水車、これをひとつのポイントとして、当時の麦などの食べ物の話から、集落を超えた人付き合いなどを学習する場として利用できると思われる。

4 教育にみるローカル・ナレッジ

旧石間小学校において行われてきたPTA活動は、学校の教師や保護者だけが参加するものではなく、地域住民が総出で参加するというものであり、その点に特色が見られる。こうした地域住民らによるPTA活動は、地域特有の事情（石間小学校における資金、物資、労働力の不足）から生まれた活動である。したがって、石間地域の時代背景を反映した地域の活動であり、これはローカル・ナレッジとして捉えることができるだろう。次に塾に関してしてみると、近くに学習塾などがなかったため、学校の先生が、放課後、有志の生徒たちに補修を行っていた。これは石間地域のもつ地理的な事情から生まれたローカル・ナレッジではないかと考えられる。

従って、地域の学校において不足していた資金、物資、労働力、学習の機会の必要性から、以上のようなPTA活動や、学校における補修がローカル・ナレッジとして生み出されたといえるだろう。また、平成12年に石間小学校は吉田小学校に統合されたが、PTA活動の一環として行われていた活動のうちの運動会は継続されており、現在にまで残るローカル・ナレッジとして捉えることができるだろう。

旧石間小学校の石間学習交流館における体験教室、料理教室は、ローカル・ナレッジを伝達する活動である。これらの教室では、伝統工芸（竹細工、わらじ、ミニ門松）や伝統料理などといったものを内容として参加者に提示している。こうした伝統工芸や伝統料理は、その内容自体が石間において集積されてきた知識や技術であり、ローカル・ナレッジとして捉えることが出来るだろう。したがって、石間学習交流館における体験教室、料理教室は二重の意味でローカル・ナレッジの活用例と見ることができる。

5 ローカル・ナレッジの活用にむけて

以上、祭礼行事、食、教育の側面におけるローカル・ナレッジとその活用方法についてみてきた。石間においては、空き家を借りて、紙すみを行っている工芸家がいるが、このように、村のローカル・ナレッジにつながる工房とギャラリーを、空き家を利用して併設し、ローカル・ナレッジの拠点とすることが考えられよう。しかしながら、空き家の維持は困難と費用を伴うものであり、既存の高齢化世帯の空きスペースを利用させてもらい同様の活動を行うことの方が、より現実的であるとも考えられる。高齢者でも取り組みが容易なこんにやくづくりを軸に、「こんにやく」を各世帯が提供し、一方で、工芸家や学生がローカル・ナレッジをいかした+αを同世帯において提供するというかたちも考えられる。今後は、住民、自治体の方々とともに、活用方法についてアイデアを出し合い討論を行い、実現可能な方策を探っていく。こうしたローカル・ナレッジの活用を検討する上で、古民家の有効な利用方法についても議論する必要があるだろう。その際、単なるローカル・ナレッジの保全、洗い出しに終わらず、新しいかたちで再生させ、持続的な集落の維持に繋がることを目指したい。